

「権利の上に眠るな」

宮崎市 志野 尚美

「76.2」、「74.6」、「68.7」、「53.7」。これは何の数字でしょう。これは順にドイツ連邦議会選挙、フランス大統領選、イギリス総選挙、日本の衆議院議員選挙の投票率（2017）だ。これを見ると日本は特に投票率が低いことがわかる。その中でも若者の投票率はさらに低く、18～19歳で46.78%、20～24歳で33.21%（平成28年参議院議員選挙）となっている。なぜこんなにも投票率が低いのだろうか。

調べてみると原因として、「時間がない」「誰に投票すればいいかわからない」「自分の一票で政治が変わると思えない」「選挙にあまり関心がなかった」など有権者としてそれでいいのかと思える意見が多くあった。投票率に表れているように、特に若い世代でそれが目立つようだ。未来を担う若い世代が投票しなければ、政治は投票の多い高齢者向けのものになる。そして、若者がさらに政治への関心を失うという悪循環が起きてしまう。

私は今16歳。あと2年もすれば有権者になる。私は選挙には絶対に行こう、自分の一票を無駄にするなんてもったいないことはしない、と思っている。先日の衆議院議員選挙の際、学校で選挙についての学習があり、それぞれの党や立候補者の公約や意見について考えた。

しかし、その時「もし自分が有権者だったら」と思うと私は誰に投票すればよいか全く決められなかった。ただ、公約だけを見ても、実行力があるのか、今まではどうだったのかわからず、自分がいかに政治に無関心だったのか痛感した。普段から政治や世の中の問題に関心を持ち、正しい知識を身につけていかなければ、いくら投票しようという意識があってもできない。そう気づかされた。このまま有権者にはなれないと思い、私は今まであまり見なかったニュース番組を見たり、ときどき新聞も読んでみるようにした。たまには家族と話してみることもある。そうすることで少しずつだが、自分の意見も持てるようになってきた。

このことから、私は投票率を上げるために必要なのは「政治をもっと身近にすること」だと思う。政治が身近になれば投票するときのハードルも低くなる。

普段からテレビや新聞などで情報を得ることはもちろん、それをまわりに発信することも大切だ。

インターネットなども正しく使えば有効な手段となる。ときどきでも家族や友人との会話の中で話題にしたり、親が子どもに政治について考える姿を見せたりして、選挙の必要性を伝える。そういった小さな取り組みが広がれば、どんな未来をつくりたいか考え、政治に積極的に参加する気持ちも芽生え、一票の重さにも気づく。また、「若者のことも見ている、考えている」と伝わるような政策をとることも必要だ。

最後に、「権利の上に眠るな」、これは女性の参政権獲得のために尽くした市川房枝さんの言葉だ。私は社会の時間にこの言葉を習ったとき、はっとさせられた。日本には民主主義を目指して、多くの人々が選挙権獲得のために全力を尽くしてきた歴史がある。その人たちのおかげで今「満18歳以上のすべての人」が選挙権を持つことができているのだ。私たちはこのことを忘れてはならない。

選挙権を持っているということがどんなにありがたいことなのか、投票するとはどういうことなのか、今一度考え直してほしい。

「権利の上に眠るな」